



学校法人 電子開発学園

北海道情報大学

Hokkaido Information University



2015年  
10月発行  
通巻 第17号

# FDニューズレター

Hokkaido  
Information  
University

## 巻頭言

### これからの大学FD活動を考える

医療情報学科長・教授 佐藤 浩樹

昨今、FDを中心とした大学教育の本質を問う取り組みが全国でなされています。企業は成長分野と未開拓分野の喪失により、限られた分野でのグローバルな経済戦争に突入し、これまで成功してきた企業構造の変革が必須となっています。このような世界的な岐路の中で企業に人材を送る使命を有する大学がどのような教育を成すべきか、全世界的に様々な大学で議論が展開されています。では日本はどうでしょうか。学生を人材（労働力）として考える企業からは人材としての付加価値を大学教育に求める議論が盛んになされています。たとえば、経済産業省からは問題解決能力および応用力を備えた「社会人基礎力」なる人材養成の提言がなされています。具体的には企業として“使える人材を養成してほしい”と大学に期待していることであると思います。さらに、日本学術会議においては社会全体を支える人材としての市民性教育の提言がなされています。こちらは、世の中を見通すことができるグローバルな意識を基本として社会の一員としての自覚を備えた「人間性」を育てるこ

とにほかなりません。脳研究の立場からいうとこの「人間性」は最も遅く発達し20代半ばに完成しますがこの発達には環境が重要とされています。ということは学生時代が「人間性」を身につける時期として最も重要な時期にほかなりません。そう考えますと必然的に大学における講義が最も重要です。私たち教員は日々この状況を意識する、つまり将来の社会を育てていることを自覚して、「社会人基礎力」および「人間性」を育てるためにはそれぞれの教員の専門性がどう役立つのかを考えながら教育を行っていくことが極めて重要であると考えます。

その中でFDは重要な取り組みであると思います。そもそもFDとは“何ぞや”と考えてみると、本学で学ぶ学生が“ここで学んで良かった”と実感できることを目標として、在学中に確実に力をつけ自信をもって社会に巣立っていけるような大学教育を教員=Facultyが、教育力を高め=development、“より良い講義”、“より良い学習環境”を目指す取り組みであると私自身は理解しております。さらに、大学での高等教育の高度化および国際化の中で大学の競争力強化のためにも重要な取り組みであると考えております。FD活動が義務化されて以来、本学においては取り組みの一部が文部科学省の質の高い大学教育推進プログラムに選定されるなどの成果が現れているのみならず、小委員会を中

## 目次

1. 巻頭言…………… 1
2. アントレプレナーシップセンターの始動にあたって… 3
3. 主体的学びの実践例について…………… 4
4. 本学のスタートアッププログラムの状況…………… 6
5. 第10回 カリキュラム・アドバイザリーボード会議 報告… 8
6. 人材育成という国際貢献… 11
7. 中国人留学生のための日本語学習教材の開発について 18
8. 編集後記…………… 20

発行：北海道情報大学

心として会議を重ね指針を明らかにするとともに、個々の教員の努力のもと様々な取り組みがなされている現状にあると思います。

FDの中でも私は「学生のやる気を高める」ことが最も重要なことだと思います。学習に対するモチベーションを高め、主体的に意欲をもって学習に取り組ませる、ということです。ではどうしたら「学生のやる気」を高めることができるのでしょうか。まず、学習する内容に対して自己あるいは教師の体験や社会との関連づけができると学習に対する動機が高まると思います。例えば、学習している内容を学生の自己経験に当てはめた場合にどうなるかをじっくり考えさせたり、学習している内容が社会に出た時にどのように役立つのかを教員の社会的経験を基として具体的な事例をあげて説明することが有効だと思います。可能であれば統一の課題に対してグループで議論させることにより、相互の考え方の理解とともに新しい気づきが生まれ、学生の視点から思考をさらに深めることができると思います。次に、学生が疑問に思っている点、躓いている点に対して教員に速やかに伝達できる方法および建設的に学生にフィードバックできる体制をとる必要があると考えます。心理学的に人間は自分に注意が払われていると感じるとやる気が出るのが自然です。学生も人間です。同様なことが言えるのではないのでしょうか。さらにコミュニケーションを密にとることが有効な手段になると思います。最近では、様々なコミュニケーションツールがあり、対面ではなくてもコミュニケーションを維持する方法が多々あります。ITを使用するのが一番と思います。この分

野に関しては当大学の得意とする所です。また、講義においても学生の主体性を尊重するように仕向ける講義デザインを考えることも必要だと思います。教員が一方的に話し知識を伝達するだけではなく、学生が自ら情報を集め、分析し、整理し、評価し、それをまとめて発表あるいはレポートにしたりする、といった学習課題を課すことも有効だと思います。でもこの教育方法における注意点が1つあると思います。学生のレベルが多様化している現在、教師が意識して学生のキャパシティを見極め、それに見合う課題量を学生ができる範囲で段階的に課すことが重要な点だと思います。継続的な思考継続、自由な発想を導くためにも常に学習環境が整っているICTの活用は非常に有意義な方法であると思います。

では最後に医療情報学科でのFDについて考えてみたいと思います。将来的に医療関連の仕事につく場合を想定した場合について考えるということです。日本の医療現場は急速な進歩をとげる一方で、社会情勢の変化に伴い医療環境においても急激な変化を起しつつあります。一例として、以前の医療現場は医師がピラミッドの頂点に立ち看護師をはじめとする医療スタッフに命令するパターンリズムが一般的でした。情報は上から降りてくるだけで一本化されしかも一方通行です。しかしながら、最近では医療の細分化および医療安全の立場より医療現場における各部門の存在は対等化しており、各々の立場より情報を作成し総合的に共有することにより質の高い医療を提供する必要となっております。さらに医師をはじめとする医療ス

タッフ不足がクローズアップされているが、一方で高度医療や全人的医療のうえで良質な医療を提供することが強く求められております。現場では困難極まる要求がなされているということです。そのためには大学卒業前に高い専門性を持ち協調的かつ主体的に職務を遂行できる人材育成が急務であり、大学教育目標の1つになりえると思います。この目標達成のためにFD活動は極めて重要な役割を担わなければなりません。具体的には、幅広い部門が連携してチーム医療を実践できるための能力、つまり専門的知識はもとより社会的態度を本幹として、①問題解決力、②コミュニケーション力、③省察力、④協調学習力を高めるためのプログラムの設定が必要であると考えます。教育指針として、①問題基盤型シミュレーション教育、②コミュニケーション教育、③eラーニング、④ポートフォリオ評価などが検討課題になると考えます。そのためには当学科として座学による講義の中に現場で必要とされる最新知識を盛り込むとともに、教育施設を有効利用した体験学習システムのさらなる導入が不可欠であると考えます。

最後になりましたが、日々の授業と学生を通して私たち教員は未来の世界に関わっています。個々の教員の学識と教育が学生の人生に、そして学生が今後関わる社会そして未来に意味があるものであってほしいと思います。そう思うことで今後の授業展開が楽しみになる気がします。長々とFDに対する私言を述べてまいりましたが今後の当大学発展のためにもFDがますます有意義で発展することを期待しまして筆をおきたいと思います。

## アントレプレナーシップセンターの始動にあたって

アントレプレナーシップセンター長 谷口 文威

現在、IoT (Internet of Things、モノのインターネット) により、現代の社会環境・ビジネス環境が大きく転換しようとしています。また、センサーやそれを用いる各種機器の高性能化及び低価格化により、アイデアをいち早くプロトタイプとして作製し、それをテストし、データを取得することで製品化・ビジネス化へのスピードアップを図ることができる環境にあります。このような状況を鑑み、昨年度より北海道情報大学アントレプレナーシップセンターが設立されました。その趣旨は、教育研究施設として、国内外のあらゆる分野において、情報技術を用いた新たな価値創造や現代的な社会問題の解決を主眼においたビジネスの創造、及びそのようなビジネスを実行しうる優秀な学生の育成を図ることを目的とするものであります。センターでは、IoTを軸としたデジタルビジネスを念頭に置き、様々な試みのできる環境を学生に提供し続けることを目指しています。

センターの性格上、本学の全学部・全学科横断型であることが要求されます。そのため、各学部からイノベーションやアントレプレナーシップに詳しい教員を構成員として選出し、センターの方向性を随時検討・評価しています。また、現代の社会のニーズに適合しているかどうかの評価も必要であり、そのために現在デジタルビジネス分野で活躍されている方々をアドバイザーとして依頼し、センターへの参画を図っています。

これまでの活動としては、6月19日から21日の3日間にわたり行われた起業体験イベント「Startup Weekend Sapporo (スタートアップ・ウィークエンド・サッポロ) Vol. 2」に、スポンサーとして参加いたしました。このイベントには、札幌市内から50名の参加があり、安田光孝准教授がコーチとして参加しました。このイベントに関しては、北海道のIT業界を紹介するメディア、キタゴエでも詳しい様子がレポートされていますので、ご興味のある方は参照してください (<http://kitagoe.jp/eventnews/startup-weekend-sapporo-2-report/>)。

今後の活動方針としては、各種コンテストへの参加、起業にまつわるイベントの開催及び情報収集を行ってまいります。現在は、北海道総合通信局(総務省)から、「起業家甲子園」の北海道地区予選への参加協力依頼があり、それに協力することを決定いたしました。地区予選は11月に開催される予定です。それに先立ち、9月25日及び10月15日に学内の

学生に対して「学生のためのスキルアップセミナー」を開催します。9月25日にはエコモット株式会社代表取締役入澤拓也氏、10月15日にはさくらインターネット株式会社代表取締役社長田中邦裕氏にご講演をお願いしております。それぞれの後半には学生グループによるビジネスプランの模擬プレゼンを行います。この2つのイベントは、総務省のWebでも公開されています (<http://www.soumu.go.jp/soutsu/hokkaido/D/20150917.html>)。

また、起業家甲子園と同時期に開催される、キャンパスベンチャーグランプリ2015の北海道大会への参加も検討しています。

10月1日には、学内及び江別市関係者を対象とした「アントレプレナーシップセンター開設記念講演会」を開催します。溝畑彰洋氏(株式会社シグマクシス)及び松村方生氏に講演をお願いし、後半には学生のビジネスプランのプレゼンを行い、ご両名からの講評をいただくという内容です。また、溝畑氏にはアドバイザーとしてセンターへの参画もお願いしています。

冒頭で述べた通り、IoTによる社会環境の大きな変化が起ころうとしています。それをいち早く取り入れるため、センターではIoTを利用した様々な機器を作製できる部屋を用意し、現在その環境を整えているところです。具体的には、ArduinoやRaspberry Piなどのデバイス開発キットを多数揃え、BLE (Bluetooth Low Energy) 等のセンサー類の取扱法などを学習・調査可能な環境にする予定です。また、その学習に必要な書籍やビジネスという観点から、リーン・スタートアップに関する書籍や新しいビジネスモデル作成に関する書籍類も多く取り揃えていきます。

機器や書籍を用意しただけでは、新たなビジネスやイノベーションを起こすには不足であり、相応の環境・コンテンツを用意する必要があります。そのため、11月初頭に米国に赴き、どの様な環境・コンテンツを先進国米国では用意しているのかを調査するため、ユーマス・ボストン (University of Massachusetts Boston)、オーリン工科大学 (Olin College of Engineering)、スタンフォード大学dスクール (Institute of Design School at Stanford) を訪問します。いずれも、MBA、イノベーション、アントレプレナーシップにおいて高い評価を得ている大学であり、大いに参考にしていきたいと考えています。

センターの設立から間もないため、まだまだ軌道に乗っているとは言えない状況にありますが、これから皆様のご期待に沿えるようセンター構成員一同努力してまいりますので、ご協力・ご指導のほど、よろしくお願いたします。

## 主体的学びの実践例について —日経STOCKリーグへの参加から—

先端経営学科 松本紗矢子

### 1. はじめに

昨年度、日本経済新聞社主催の株式学習コンテスト「第15回日経STOCKリーグ」に、松本ゼミ3年生（当時、現4年生）が2チーム応募しました。平成26年5月末～平成27年1月上旬の約8ヶ月、ゼミ時間外も使って積極的に活動した結果、一次審査・二次審査を経て、1チームが大学部門（116大学631チーム参加）で、見事、入選しました。主体的学びの観点から、入選に至る過程を振り返っていききたいと思います。

日経STOCKリーグは、手許に500万円の資金があると仮定して、各チームが設定した投資テーマに基づき、どの企業に投資するかについて株式投資レポートを作成するコンテストです。3年生のゼミ募集時に「日経STOCKリーグに挑戦」と明記したところ株式投資や企業分析に興味を持つ7人が集まりました。

教員として、日経STOCKリーグを選定した狙いは、①ゼミ生の意識・意欲を高めるためプロジェクト志向で学外コンテストに応募すること、②主体的な取り組みが不可欠となるレベルの難易度を有すること、③投資テーマの設定等によっては全国の難関大学と肩を並べて勝負できること、の3点です。ゼミで日経STOCKリーグに取り組むのは今回が初めてで、手さぐりでのスタートとなりましたが、すべて学生たちが解決してくれました。

### 2. チーム分けと投資テーマの検討

日経STOCKリーグは、3～5人で1つのチームを組むのが前提です。松本ゼミは7人。その分け方をどうするか悩みましたが、ゼミ生と相談し、「ディスカッションで投資テーマを2つに絞り、どちらに取り組むたいか選択する」という方法に決めました。

その後、テーマ決めのディスカッションを行いました。ディスカッションは、完全に自由で、「東京オリンピック!」「北海道といえば農業!」など、ゼミ室のホワイトボードには書ききれないほどのキーワードが次々と並びました。それを3週間ほど繰り返し、最終的にゼミ生たちが選んだテーマは、「BOPビジネス」と「宇宙ビジネス」でした。

BOP（Base Of the Pyramid：所得階層ピラミッドの底辺）ビジネスとは、「利益を上げつつ、貧困にあえぐ人々が直面している問題を解決するビジネス」です。その説明を学生から受けた際には、知識の広さに感心しました。他方の「宇宙ビジネス」は、「北海道情報大学のウリの1つでもあるし、宇宙関連ビジネスは、今後大いに注目される分野」として挙げられたテーマでした。

どちらのテーマに取り組むたいかを話し合ったところ、すんなりと2つのチームに分かれたため、悩んでいた“チーム分けの方法”と“投資テーマ”は同時に解決しました。

### 3. 主体的な学びの取り組み内容

具体的な作業に取りかかる前段階として、全員に過去の入賞レポートを一読してもらいました。どのような内容に、どれぐらいの量や質で取り組めばよいかの目安を知ってもらうためです。例えば、投資企業を選択する方法として、財務分析を使っているレポートが多いことに気づいて欲しいという意図がありました。果たして、思惑通りに「財務分析を勉強しよう」という機運が自然と高まり、基本スキルを身に付ける勉強が開始されました。

財務分析の勉強終了後は、早速、投資テーマに沿った調査、データ収集が始まりました。どうすれば、最大の成果を発揮できるのか悩んだ末、各班の取り組み方法（意向）を尊重することにしました。チームごとに特徴が出て、とても興味深い状況でした。

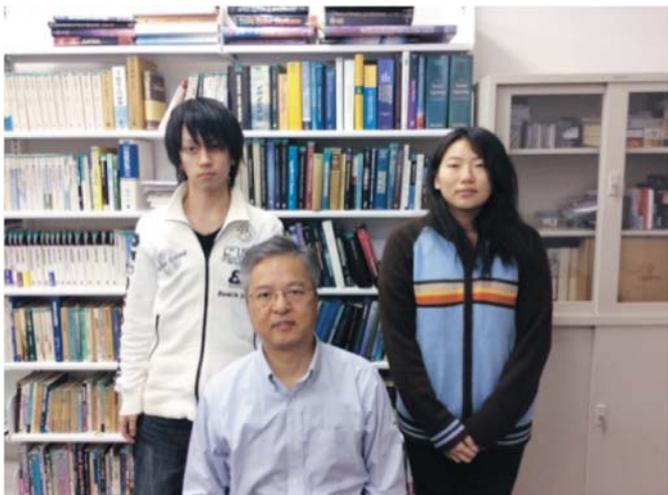
BOP班は、ゼミの時間に打ち合わせを行い、担当箇所を各自のペースで、期日までに仕上げていく方法を取りました。例えば、絵を描くのが上手な淡谷真平君はインパクトのある表紙作成や企業調査のビジュアル的なまとめを担当、文章作成が上手な田中佑奈さんはメインの文章構成や執筆を担当、コツコツ分析するのが上手な中西壮登君はBOPに取り組む企業の財務分析と考察を担当するなどの分業をしていました。少しでも誰かが期日に間に合わないスケジュールが崩れる取り組み方ではありましたが、強い責任感で結ばれているようでした。

宇宙班は、ゼミ時間の水曜4講以外に毎週火曜5講に集まっていました。これは自主的な行動で、その意欲的な様子に私も驚きました。リーダーの酒井梨乃さんを中心に、安藤竜馬君、大家義広君、山西嵩太君の全員が、皆でディスカッションをしながら作り上げていきかけたそうです。また、「本学に宇

宙の専門家がおられるので、ぜひご意見を伺いたい」ということで、若松義男先生と渡部重十先生にインタビューを行いました。お二人の先生から、宇宙について熱く語っていただき、メンバーは心から感謝していました。きっと、このことも宇宙班の活動の原動力になったと思います。



▲若松先生インタビュー時の写真  
左から山西嵩太君、若松義男先生、酒井梨乃さん



▲渡部先生インタビュー時の写真  
左から安藤竜馬君、渡部重十先生、酒井梨乃さん

#### 4. 主体的な学びを支えた情報ツール

取り組み方はそれぞれ異なるとはいえ、2つの班には、共通する部分がありました。それは、情報共有の徹底です。具体的には、SNSでゼミ教員を含めたグループを作り、質問や打ち合わせの内容を常に共有すること、作成した資料をGoogleドライブ上で共有することでした。こうすることで、メンバー全員が、それぞれどこまで進んでいるかを把握でき、またゼミ時間外での質問や分析結果の確認などの際に、私も素早く対応することができました。

「取り組むからには全力で」という気迫が常に2

つの班から感じられ、締切日ぎりぎりまで調査、分析は続き、最終的にBOP班は「貧困をビジネスが救う～Win&Winの関係～」（40頁）、宇宙班は「宇宙は人を救う～人類への貢献と更なる進歩～」（51頁）というタイトルで提出しました。ともに努力の結晶といえる長文のレポートで、「無事に提出できたときの安堵感がすごかった」とゼミ生たちは口々に語っていました。

#### 5. おわりに—主体的学びの可能性—

全国の116大学631チームが応募した大学部門の中から、入選に至ったのはBOP班でした。宇宙班は「宇宙食や宇宙技術など、宇宙をテーマに幅広い企業を調査した分、テーマがぼやけたようだ」と反省の弁を述べ、BOP班は入選したにもかかわらず、「レポートには、まだ改善の余地があった」と悔しそうな反応でした。謙虚な学生たちの姿を見て、まだ伸びしろがありそうだと頼もしく感じました。

改めて振り返ると、主体的な学びを可能にしたのは、ゼミ生の知識欲や責任感はもちろん、①締切期日のある明確な目標を決めたこと、②複数のゼミ生が協働する活動内容を設定したこと、③いつでも質問できる環境をつくったこと、があげられます。言い換えると、教員は「主体的に学ぶ機会」と「気づきのきっかけ」を提供したに過ぎません。

4年生になったメンバーは、新たな別の論文コンテストに向けて頑張っています。道立図書館での資料探し、夏休み中のアンケート調査やインタビューの実施など、昨年培った主体性を存分に発揮しています。「頑張れば頑張った分、自分の力になる」ことを実感してもらえるよう、これからも学生のみなさんをサポートしていければと思っています。



▲日経STOCKリーグ入選の記念写真  
左から淡谷真平君、中西壮登君、田中佑奈さん、松本

## 本学のスタートアッププログラムの状況

情報メディア学科 三浦 洋

### 1 定着したスタートアッププログラム

本学の現状を見ると、前後期それぞれの学期の始まりとなる4月と9月にスタートアッププログラムを実施する体制がほぼ定着しているといえる。

概括すれば、スタートアッププログラムを行うことによって、授業の開始がスムーズになっているほか、後期のスタートアッププログラムに組み込まれた防災訓練が年間行事として固定されるなど、一定の成果を上げていることが実感される。

そこでまず、今年4月と9月のスタートアッププログラムの日程を簡潔に記録しておくことにする。

### 2 4月のスタートアッププログラム

今年4月のスタートアッププログラムは、3日の入学式に続いて4～9日に実施された。概要は以下のようである。

#### 【1年生】

4日（土） i Pad説明会と英語、数学、国語の習熟度調査。

6日（月）クラスミーティングに始まり、図書館利用講習会、履修説明、消防署講話、警察署講話など講堂での催し。その後に教職課程説明会。

7日（火）クラスミーティングに始まり、学科ガイダンス、自己カリキュラム計画、健康診断、教科書購入。

8日（水）～9日（木）クラスミーティングに始まり、サークル紹介の後、宿泊研修（ホテルミリオネー）。



写真1：宿泊研修の様子

#### 【2年生】

6日（月）講堂で履修説明の後、クラスミーティング、学科ガイダンス、自己カリキュラム計画、履修登録、健康診断、教科書購入。

#### 【3年生】

9日（木）ゼミミーティング、学科ガイダンス、履修登録、健康診断、教科書購入。

#### 【4年生】

8日（水）ゼミミーティング、学科ガイダンス、履修登録、健康診断、教科書購入。

以上の内容のうち、とくに各部署で議論を尽くした上、実施された項目としては、第一に、1年生の習熟度調査が土曜日に実施されたことである。これは、スタートアッププログラムの日程を合理的に組み、授業開始を可能な限り早めることと、英語と基礎数学のクラス編成の作業に時間を要することから習熟度調査を早期に実施する必要があったからである。第二に、1年生の宿泊研修がスタートアッププログラムの最後に置かれたことである。これは、昨年の宿泊研修が最初に置かれていたことについて、反省を含めて日程が変更された。偶々ホテルに空きがあったため、当初仮予約していた日程から移すことができたものである。

なお、1年生のクラス担任が2年生のクラス担任も兼ねているため、1年生と2年生のクラスミーティングの時間が重ならないように配置することや、4年生の健康診断日を早めに設定し、就職活動に支障のないよう配慮した点は例年通りである。

### 3 9月のスタートアッププログラム

9月のスタートアッププログラムは、18日（金）に行われ、1、2年生のクラスミーティングと3、4年生のゼミミーティング、及び防災訓練が実施された。

後期の授業開始前に、1日で実施する方式は、既に定着したといえよう。

#### 4 スタートアッププログラムの重要性と課題

既に繰り返し述べたように、本学においてスタートアッププログラムが定着したのは幸いである。しかし、このプログラムの重要性に鑑みると、なお大学全体で考えるべき課題も残っている。

まず、授業の回数を確保するため、毎年腐心して立案されている学年暦編成の問題との関係をあらためて考えなければならない。つまり、スタートアッププログラムが学年暦を圧迫しないよう、日程をどう合理化するかが常に課題なのである。いかにしてスタートアッププログラムをいっそう意義ある行事に改善しつつ、日程の面では授業回数の安定した確保と調和させるか、このことが毎年、最大のテーマになっているとあってよいだろう。

肝心なのは、スタートアッププログラムの目的を今一度見直すことであろう。そのため、常に視野に収めておかなければならないのが、新入生と2年生以上との状況の違いである。言うまでもなく、新入生に対する4月のスタートアッププログラムは、格段に重要な意味を持つ。単に前期授業開始前の助走期間というにとどまらず、大学が新入生をどのように迎え、どのように入学式以降のイニシエーションを行おうとするか、その姿勢が問われる場面なのである。つまり、学生に対する大学の姿勢が現れるという意味で、大学としての哲学が問われるのである。

その点に鑑みると、スタートアッププログラム案の作成を行う委員会というのは、本来、学内各部署

の代表者による連絡協議会組織の次元にとどまることなく、管理職を中心とする大学幹部が新入生に対する大学のアプローチについて哲学を発揮するべき場である。より具体的にいえば、新入生に対する4月のスタートアッププログラムは初年次教育の一環、あるいは初年次教育との連続性において考案されるべき行事であるから、共通教育に責任を持つ教養部長、さらには新入生宿泊研修を主催する学生委員会の長としての学生部長が協調し、責任を持って立案と実施に当たるのが適切だと考えられる。今後は、入学前教育と新入生に対するスタートアッププログラムとの関係を見直し、再構築する必要に迫られると予想されるため、なおさらスタートアッププログラムを立案する組織の体制固めが欠かせなくなるだろう。

無論、現在の組織体制においても、スタートアッププログラム小委員会が下属する全学教務FD委員会において最終的にスタートアッププログラム日程が決定されることになっていることから、チェック機能は一定程度働いているとあってよい。実際、スタートアッププログラム日程の決定が著しく遅れる事態や、内容上の大きな問題はほぼなくなってきている。

今後は、さらにスタートアッププログラムの企画立案の仕組みと実施体制をともに充実させ、大学全体の取り組みとして、合理的で有意義なプログラムを計画してゆくことが望まれる。



写真2：iPad説明会の様子

## 第10回 カリキュラム・アドバイザー ボード会議 報告

先端経営学科 准教授 諸岡 卓真

平成27年9月4日（金）に、本学eDCタワーで第10回カリキュラム・アドバイザーボード会議が開催された。プログラムは以下の通りである。

### 第10回カリキュラム・アドバイザーボード会議

- 11：00～11：10 アドバイザーの紹介、学長挨拶
- 11：10～11：40 HIU VISION 2020（案）について
- 11：40～12：40 平成29年度カリキュラム編成の基本方針について

#### ▽各学科等の基本方針

- ・先端経営学科（長井敏行 教授）
- ・システム情報学科（谷川健 教授）
- ・医療情報学科（佐藤浩樹 教授）
- ・情報メディア学科（守啓祐 教授）
- ・共通教育（穴田有一 教授）

#### ▽学部横断型教育プログラム

- ・「ビッグデータ（仮称）」の提案（向原強 教授）
- ・「宇宙とメディア」（渡部重十 教授）

12：40～13：40 昼食

13：40～15：00 アドバイザーからコメント  
質疑応答

15：10～16：30 懇親会

本学の9名のアドバイザーから、6名の出席があった。

明神 知、北海道情報大学 経営情報学部 先端経営  
学科 教授

福井素子、日本アイビーエム・ソリューション・サ  
ービス株式会社 代表取締役社長

平野雄士、社団法人 日本海員掖済会 小樽掖済会病  
院 事務部長

依田知則、Chaos ASIA代表

中川寛之、ブルームバーグL. P. ニュースルーム、  
企業ニュースエディター

松田直久、北海道札幌国際情報高等学校 校長

会議では、学内アドバイザー、外部アドバイザーの紹介に続き、富士学長が挨拶を行った。その中で、本学における教育イノベーションの推進体制、主体的な学びへ導くための実行プラン2015、ICTによる自律的FD推進モデルなどについての説明がなされた。また、これまでのカリキュラム・アドバイザーボード会議の活動経過と、そこでなされた外部アドバイザーからの提言が紹介された。

引き続き、富士学長より「HIU VISION2020（中間まとめ）」の報告がなされた。報告では、18歳人口が減少する状況下で、本学を取り巻くポジティブな状況としてデジタルビジネス時代の到来が挙げられた。デジタルビジネスでは、今後IoT（Internet of Things：モノのインターネット）分野の大幅な伸張が予測されているが、本学はICTを通じた多様な分野への社会貢献が「きらりと光る地方の中小規模私立大学等の取組の例」（文部科学省）に選ばれるなど、ICTに関する教育・研究に実績がある。このような状況を踏まえ、「情報化社会における新しい大学と学問の創造」という建学の理念を再確認し、「教育の質を向上させ、主体性を持った高度ITプロフェッショナルの育成を目指す」という方向性が打ち出された。



平成29年度カリキュラムの基本方針について、先端経営学科、システム情報学科、医療情報学科、情報メディア学科、共通教育の各担当者から報告がなされた。

先端経営学科の基本方針について、長井俊行教授は「デジタルビジネス時代のITと経営とが融合した実践的な学問を学ぶことが先端経営学科の学生には必須である」と述べ、現行の5コースを3コースに集約すること、各コースに必要なコア科目を設定すること、各コースのコア科目は他のコースでも必要な

選択必修科目として履修を奨励することという具体的な対応策を報告した。

システム情報学科の基本方針については、谷川健教授より報告があった。デジタルビジネス時代に対応した基本的な考え方として、新しいことを追い求めるよりはその基礎となる枯れない知識を体系化すること、最新技術とその応用を伝えることで学生の動機づけを行うことなどが必要であることが確認され、後者に関する具体的な方策として、1年生前期に最新動向をわかりやすく伝えるオムニバス科目を開講することが挙げられた。その後、現状の問題点の分析を踏まえ、ITアーキテクトコースの廃止、ネットワーク関連のコースの追加などの対応策が報告された。

医療情報学科の基本方針は、佐藤浩樹教授より報告された。医療情報学科の現状の分析を通し、取得できる資格が民間資格に限られるなどの問題点が指摘された。その上で、情報教育が実践できる国家資格取得の専攻コースを立ち上げること、新たなカリキュラムの構築することなどの施策が提起された。また、学部横断型教育プログラムとして、健康情報に関するオムニバス形式のe-learning教科の立ち上げなどの試みについて説明された。

情報メディア学科の基本方針は、森啓祐教授が報告した。情報メディア学科で育成する人材像が確認され、今後の重点項目として専門カリキュラムの科目を「基礎科目群」「応用科目群」「選択科目群」の3つの科目群に分類して単位修得システムの簡素化を図ること、難易度に応じた科目のナンバリングを行うことなどが説明された。また、基礎科目の教科としてBUT (Boot up Training) の導入が提案された。さらに「VISION2020」に対応した重点領域として、デジタルビジネス、ビッグデータ、モバイルアプリケーション、IoT、3Dプリンタといったものが挙げられた。

共通教育における基本方針の報告は穴田有一教授が担当した。カリキュラム検討の要点として、「人間・自然・社会」科目の適正化、初年次教育の効果的な実施、「ヘルスリテラシー入門」の新設などが挙げられ、現在の進行状況と今後のスケジュールなどが確認された。

最後に、学部横断型教育プログラムとして、向原

強教授より「ビッグデータ（仮称）」、渡部重十教授より「宇宙とメディア」についての新規科目の提案があった。



以上の報告・提案を受け、外部アドバイザーからコメントをいただいた。各アドバイザーからのコメントの概要は次の通りである。

明神知氏：日本も大学もIT業界も何らかの「チェンジ」が求められている。地域の特徴を活かした草の根型のイノベーションが必要なのではないかと。また、本学の「VISION2020」の方向性は現代のITに関する状況に合致している。

福井素子氏：大学がビジョンを表明すること自体は評価するが、ミッションとビジョンの差異が不明確である。また、内容がまだ整理されておらず、KPI（キーパフォーマンス指標）の期限が不明確である（なお、質疑応答の際に富士学長から補足がなされ、「VISION2020」は中間まとめの段階ということもあり、研究の分野に関する記述が不十分であったこと、KPIは2020年を目途としていることが説



明された)。平成29年度カリキュラムについては、コースが多すぎて学生に内容が伝わりづらい学科がある。今後注目できる分野として、アナリティクス、コグニティブ・コンピューティングなどの分野がある。ビッグデータや宇宙に関する学部横断授業の試みは面白く、大学の特色になり得る。

平野雄士氏：主に医療情報学部に関して、実際の医療経営に携わる人はごくわずかであり、基本的な知識は必要だが、それよりも実践を重視すべきである。また、コミュニケーションの取れない学生は就職の面接の段階で不合格になってしまうため、接遇教育を必須科目にしてもよいのではないか。福井氏と同様、ビッグデータや宇宙に関する学部横断授業の試みは大学の特色になると思われる。

依田知則氏：全体として本学が大学としてどのようなポジションをとるのか（たとえば、グローバルな方向へ進むか、地域重視の方向へ進むかなど）が見えなかった。ポジションの設定によって具体的にやるべきことが変わってくるため、まずはそれを定めることが必要ではないか。本学の学生について、情報に関する教育を受けていても、主に中小の地場企業に就職した場合、その能力うまく出させてもらっていない傾向がある。大学としては、情報化社会に対応した人材育成自体が特色があるので、その方向性を尖らせていってほしい。

中川寛之氏：高齢化の進展により、マーケットを海外に求める起業が増えていくので、ITスキルの他に語学力が必須になる。また、大学に行くメリットは教養課程で学んだ幅広い知識にある。若いうちに教養課程程度でも触れておくことが社会人として非常に重要なのではないか。その意味で、学生の倫理規定に基づく人材育成は評価できる。大学HPに関して、「メディアの方へ」というタブがあってもよいのではないか。大学の広報という意味では効果が違って来る。女子学生の確保に向けて、おしゃれなカフェなど、女子向けの方策を考えるべきである。

松田直久氏：小規模大学としての強みを活かして、手をかけた細やかな教育を実践しているという印象であった。自身の体験として、高校生はきちんとした大学生が集まっている学生を選ぶことが多く、高校生も保護者も実際の学生の様子が大学選択の重要な要素になっている。また、言語教育の充実した大学を選択する傾向がある。インターナショナルを目指すのであれば外国語、ドメスティックを目指すのであれば日本語でのコミュニケーションを充実させるべきである。さらに、高校生は学科選択の際に細分化された学科を避ける傾向があるため、入学時は間口を広げておいて、入学後にコースを選べるような形にした方がよいのではないか。女子学生が増えている大学は元気になっている印象がある。パウダールーム、カフェなど、心配りが見えると安心感を覚えるようである。

アドバイザーからのコメントについて、その後活発な質疑応答が交わされ、懇親会でも積極的な意見交換が行われた。教育・研究活動、大学運営が適切であるのかを考える上では、実際に現場で活躍している方々の「外」からのご意見は極めて貴重である。今回のご意見やご指摘を今後の大学全体の運営に活かしていくことが重要である。

最後に、第10回カリキュラム・アドバイザーボード会議に出席していただいたアドバイザーの皆様と本学教職員の皆様に心より感謝いたします。



## 人材育成という国際貢献

～タイ王国ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校  
との交流から考えたこと～

経営情報学部 教授 穴田 有一

### はじめに

おそらく、大学の社会的役割は時代とともに変わってきたのだと思います。現代の大学の源流といわれる1000年近く前の初期の大学は、大学団、国民団、学部、学寮など一言では言えないくらい多様でしたが、本質的には、商人、職人などの利益擁護集団と同様に、知識を学ぶものと教えるもの自主性を維持しようとするギルドでした。これらの初期の大学は、学生にとって全ヨーロッパに渡るボーダーレスなものでしたが、時代とともに徐々に形を変えて著しく増殖し、500年位前の教皇をパトロンとする大学を経て、200年ほど前に、今日の多くの国の大学の雛形の一つとなる国家をパトロンとするフンボルト型大学へと移り変わりました。この大学の変容は、大学の社会的使命の変化と表裏一体をなすものでしょう。

大学の機能の根源を突き詰めていけば、「知の発見」と「知の伝達」になります。日本語の「教授」は、英語でもラテン語でもprofessor、語源はprofess/profiteor、つまり人前でしゃべること、すなわち、「知の伝達」を行う人に他なりません。その根源は、紀元前5世紀のアテネから連綿と続く高等教育の基本的機能です。そこに、200年ほど前、国家が大学のパトロンになったころから「知の発見」が大学の機能に加わったというのが私見です。あるいは、加わったというよりも変調増幅されたと言った方がいいかもしれません。「知の発見」は二面性を持ち、知の地平を広げて人類の存在理由を宇宙の高みに押し上げる一方、リアルな幸福にも大いに貢献します。

近年、大学はその在り様が不安定になり、安定な姿を模索して揺れています。そのようなときには、ときどき原点に立ち戻り、その幹からぶれないブランチとして社会的役割を模索するのが良いと思います。

### 振り返りと気づき

ラジャマンガラ工科大学タンヤブリ校 (RMUTT) とのお付き合いは、2006年7月にブラジルのリオ・

デ・ジャネイロで行われた国際純正および応用化学連合主催の国際学会で、筆者がRMUTTのDr.Chaiyoot Cahngsarn氏と偶然知り合ったことから始まりました。学内で、「国際コラボレーション」として知られている学生の相互訪問型ICT作品制作ワークショップは、2011年度に「第1回HIU-RMUTT国際WEBデザインコンテスト・相互訪問Workshop (2012年3月)」としてスタートしました。「国際コラボレーション」は、グローバル人材育成プロジェクトとして学内外で評価され、本学とRMUTTとの交流の代名詞のようになってきましたが、表1にまとめた年表からわかるように、2008年度から始めた国際WEBデザインコンテストによる学生交流が助走路になっており、教職員の研究交流がバックボーンになっています。

2008年度から始めたRMUTTとの国際WEBデザインコンテストは、表1には記されていませんが、学生の自主的、主体的学修を促すことを目的に教員有志により2001年度から実施している学内WEBデザインコンテストの延長上にあります。国際WEBデザインコンテストは、両大学の学内コンテストで入賞した作品を国際コンテスト応募作品とし、両大学に設けた審査委員会がインターネット上で合同審査し、入賞作品を決め表彰するというものです。本学からの働きかけにより、RMUTTでは、この国際コンテストのために学内コンテストを始めました。国際WEBデザインコンテストは2010年度まで続きますが、2009年度の第2回コンテストには、ラオス国立大学 (NUOL) も参加し、3大学による国際WEBデザインコンテストとして実施されました。国際WEBデザインコンテストの表彰式はRMUTTで行われ、本学から入賞者した学生数名が出席して、僅か1日ですがRMUTTの学生と交流しました。実は、2008年度の第1回国際コンテスト表彰式にRMUTTから参加した学生の一人Pongpon Nilaphruek氏が現在はRMUTTの講師になっており、2011年度から実施している相互訪問型ICT作品制作ワークショップの指導教員として、毎年本学を訪れています。この時の学生派遣は、日本私立学校振興・共済事業団の教育・学習方法等改善支援に採択されたことで実現しましたが、この支援は2010年度までのものであり、その後の支援が得られず、2010年度の第3回国際WEBデザインコンテストの表彰式は、各大学それぞれが独自に行うことになりました。この国際コンテストの発展形として構想した両大学学生の相互訪問

交流が、2011年度に実施した第1回相互訪問型ICT作品制作ワークショップですが、これは、独立行政法人・日本学生支援機構（JASSO）の留学生交流支援制度（SS&SV）に応募し採択され、RMUTTから本学への学生派遣費用が得られたこと、さらに、これまでの実績とこの採択を評価して下さった本学の支援により実現しました。

一方、RMUTTと京都大学が共同研究の一環として毎年行っているシンポジウムEco-Energy and Material Science and Technology Symposium (EMSES)の7th EMSES (in Chiang Mai, Thailand) に本学の長谷川前学長が出席し基調講演されましたが、これは、RMUTTが主催または共催したシンポジウム、ワークショップ、国際会議等に本学から参加した研究交流の一例です。また、RMUTTとの交流拡大のためにいくつもの合同会議が行われてきたことも表1の年表からわかります。

RMUTTとの交流を振り返ると、「知の発見」と

「知の伝達」の両方のブランチを伸ばしながら交流を進めてきたことがわかります。また、これらの教職員交流と学生交流を継続する中で、強い信頼関係が築かれ友情が育まれてきました。

ところで、周知のように、本学は中国・南京大学と1999年以来、長い交流の歴史を刻み、これまで多くの留学生が本学で学んでいます。その根幹は、故松尾三郎初代理事長と中国電子機械工業部計算機局長であった郭平欣先生との国を越えた友情と厚い信頼関係によるものでした。1983年に、本学が所属する電子開発学園グループの（株）エス・シー・シーが南京大学の教員や卒業生など20数名を招聘し2年間に渡る技術研修を実施したことにより南京大学とも強い信頼関係が築かれ、今日の南京大学との強い交流が生まれたのだと思います。

南京大学との交流やRMUTTとのこれまでの交流から学ぶことは、国際交流の基礎には、友情と信頼関係があるということではないでしょうか。国際交

表1 本学とRMUTTの交流

年度	学生交流	教職員交流	協定その他
2006		RMUTTからの第1回訪問団 (Dr.Somchai, Dr.Somma, Dr.Chaiyoot, Master Course students,他, 10月24日)	International Union of Pure and Applied Chemistry (IUPAC) Macromolecular Symposium (MACRO2006, Rio de Janeiro, 7月)
2007		HIUから第1回訪問団(井野学長, 穴田; 3月4日)	日本私立学校振興・共済事業団(教育・学習方法等改善支援)採択により, 2008年度, 2009年度の国際WEBデザインコンテスト・RMUTTへの学生訪問を実施
		RMUTTからの第2回訪問団 (President Dr. Numyoot, Dr.Somchai, Dr.Somma,他, 5月21日)	
		RMUTTと京都大学が主催する 5thEco-Energy and Material Science and Technology Symposium (EMSES)に参加(穴田, 招待講演; 11月23日, Pattaya)	
2008	第1回HIU-RMUTT国際WEBデザインコンテスト表彰式でHIU学生がRMUTT訪問(引率: 隼田, 齊藤一; 嘉数学長, 穴田; 2009年3月)	RMUTTの第3回訪問団 (President Dr. Numyoot, Vice president Dr. Churairat, Dr.Somma,他, 7月18日)	HIUにて国際学術交流協定覚書 (MOU) 調印 (HIU, 7月18日)
		“Workshop on ICT Education and Research Activities”開催 (President Dr. Numyoot, Vice president Dr. Churairat, Dr. Somma,他15名; HIU, 7月18日)	
2009	第2回HIU-RMUTT国際WEBデザインコンテスト表彰式でHIU学生がRMUTT訪問(引率: 安田, 穴田; 2010年3月)	7thEco-Energy and Material Science and Technology Symposium (EMSES)に参加(長谷川学長, 基調講演: 穴田, 講演: 中島潤; 11月20日, Chiang Mai)	
2010	第3回HIU-RMUTT国際WEBデザインコンテスト表彰式でHIU学生がRMUTT訪問(インターネットで表彰式)		国際交流・留学生支援事務室設置(4月1日)
2011	第1回HIU-RMUTT国際WEBデザインコンテスト・相互訪問 Workshop(引率: 川上, 隼田, 穴田, 小黒, 2012年3月)	第9回タイ王国国際および国内工学教育会議(9th International and National Conference of Engineering Education, 9thINCEE)に参加(穴田, 招待講演; 5月4日, Phuket)	日本学生支援機構(SS&SV)採択により, 2011年度の国際WEBデザインコンテスト・相互訪問Workshop実施
			HIUにて国際学術交流協定覚書 (MOU) 更新調印 (HIU, 7月18日)

2012	第2回HIU-RMUTT国際WEBデザインコンテスト・相互訪問 Workshop(引率:安田, 広奥;富士副学長, 穴田, 小黒, 2012年10月)	RMUTT & HIU国際交流拡大合同会議(学生交流の拡大, 教員の研究交流の進展について合意; iWDCの他, iSFC, iCPC, iETCの実施; Dr.Natha他6名, HIU, 10月10日)	日本学生支援機構(SS&SV)採択により, 2012年度の国際WEBデザインコンテスト・相互訪問Workshop実施
		RMUTT & HIU国際交流拡大合同会議(学生交流の拡大・教員の研究交流確認:eラーニング共同研究, 宇宙情報コース, 観光情報コースの交流合意; 富士副学長, 穴田, 安田, 広奥; RMUTT, 10月30日)	
		10thEco-Energy and Material Science and Technology Symposium (EMSES)に参加(穴田, 招待講演, International Scientific Committee; 11月20日, Ubon-ratchathani)	
		The 15th International Conference of International Academy Physical Sciences(CONIAPS XV)に参加(森澤経営情報学部長; 岸田, 講演; 穴田; 12月9日, RMUTT)	
		RMUTT & HIU国際交流拡大合同会議(学生交流Workshopの分野拡大の体制など細部の確認; 森澤経営情報学部長, 穴田; RMUTT, 12月11日, RMUTT)	
		RMUTT創立38周年記念行事に出席(富士元副学長; 2013年1月18日)	
2013	第3回HIU-RMUTT国際WEBデザインコンテスト・相互訪問 Workshopを新規授業科目「国際コラボレーション」として実施。HIUは2単位付与。国際ショートフィルムコンテスト・Workshopを試行。(引率: 隼田, 川上, 島田; 穴田, 今長, 小黒, 8月, 9月)	Programing Contest, ET-Robocon実施検討会議(広奥, 谷口, 棚橋; 5月2日)	日本学生支援機構(留学生交流支援制度(短期派遣・短期受入れ))採択により2013年iWDC「国際コラボレーション」および国際ショートフィルムコンテストWorkshopを実施
		ラジャマンガラ工科大学 (RMUT)理事長訪問団来学(Chairman of The University Council RMUT Dr.Sumate Yamnoon他, RMUTグループ副理事長, 学長等総勢23名のVIP来学, 8月8日)	
2014	iCPC, iETCのHIU-RMUTT国際コンテストをインターネットで実施。(1月29日) iCPC, iETCのHIU-RMUTT国際コンテスト表彰式をスカイプで実施。(3月14日) 第4回iSFCを「国際コラボレーション」に加えて実施。HIUは2単位付与, RMUTTは1単位付与。国際コンピュータプログラミングコンテストを試行。(引率: 隼田, 大島, 谷口; 穴田, 小黒8月, 9月)		日本学生支援機構(留学生交流支援制度(短期派遣・短期受入れ))採択により2014年度のiWDC・iSFC「国際コラボレーション」および国際プログラミングコンテストWorkshopを実施
			科学技術振興機構(JST)のさくらサイエンスプラン採択により, 2014年度のiWDC・iSFC「国際コラボレーション」および国際プログラミングコンテストWorkshopを実施
2015	第5回iWDC・iSFC・iCPCを「国際コラボレーション」として実施。HIUは2単位付与, RMUTTは3単位付与。(引率: 安田, ライアン, 齊藤健司; 穴田, 小黒, 8月, 9月)	宇宙情報システムコース会議(富士学長, 渡部, 谷川, 若松, 穴田, President Prasert, Vice-President Sommai, Assistant to President Nahta, Deputy Dean Uravis; 8月28日)	日本学生支援機構(留学生交流支援制度(短期派遣・短期受入れ))採択により2015年度の「国際コラボレーション」を実施  科学技術振興機構(JST)のさくらサイエンスプラン採択により, 2015年度の「国際コラボレーション」を実施

流に限らず交流にはウィン・ウインの関係が必要なのは言うまでもありませんが、特に国際交流には、それにも増して強い信頼関係が必須であると考えます。南京大学とRMUTTとの交流を振り返ると、強い信頼関係に基づいて行われてきた本学の国際交流の大きな柱は人材育成であり、伝統的な profess/profiteorとは異なりますが、現代的なスタ

イルの「知の伝達」であることに気づきます。

#### グローバル人材育成

「グローバル人材育成会議審議まとめ(首相官邸政策会議、平成24年6月4日)」によると、グローバル人材の概念には次の3要素が含まれるとされています。

要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力

要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感

要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー

すなわち、グローバル人材とは、単に英語でコミュニケーションできることではなく、自国の文化に根差したアイデンティティーをもち、チームワークに配慮しつつ積極的に課題に挑戦して、諦めずに結果を求めるような人物像です。あるいは、知識基盤社会でグローバル化が進行する中で、予測不可能な諸問題に対して自分が進む方向を主体的に考えていける人物像としてグローバル人材が描かれているのだと思います。2011年度から本学とRMUTTが共同で始めた学生相互訪問型ICT作品制作ワークショップは、北海道情報大学の強みを生かして、グローバル人材という人物像に向かうベクトルに沿って進めている人材育成プログラムです。そしてこれは、本学の人材育成であるとともに、RMUTTの人材育成でもあります。

国際WEBデザインコンテストを伴う相互訪問型ICT作品制作ワークショップ・プログラムは、2013年度から「国際コラボレーション」という選択2単位の授業科目になり、単位取得を伴う取り組みになりましたが、RMUTTでも、本プログラムに参加した学生は、単位を取得できるようになりました。RMUTTの教務規則に従い、2013年度は取得できる単位数は1単位でしたが、今年度2015年度は最大3単位まで取得できます。また、2011年度から2013年度までは、Web作品制作のみのプログラムでしたが、2014年度からはショートフィルム、2015年度からはコンピュータ・プログラミングも加え、3分野を取り込み、より多くの学生に参加の機会を与えることになりました。

ユニバーサル・アクセス時代を迎えた今日の大学生の学力は多様であり、本学でもリメディアル教育として高校退職教育による補習を行わなければならない学生が在籍しています。しかし、一方では、非常に学力の高い学生や、ICTに習熟し、それらの専門知識に秀でた学生も在籍しています。今日では、多様な学生に対応した教育プログラムを実施することも私立大学の使命です。本学の相互訪問型ICT作品制作ワークショップ・プログラムは、高い学力と高いICT活用力を備えた学生をグローバル人材として育成することを狙いとし、多様な学生の教育を充

実しようとするものです。

## 国際コラボレーション

「国際コラボレーション」は、上述のように本学とRMUTTの学生相互訪問型ICT作品制作ワークショップを授業科目としたものですが、このプログラムでは、学生が達成する目標として、次の4つを定めています。

- (1) 作品制作のICT活用力を向上させる。
- (2) グローバルコミュニケーション力を向上させる。
- (3) 両国の文化を互いに深く理解する。
- (4) 両国の学生相互の友情を育む。

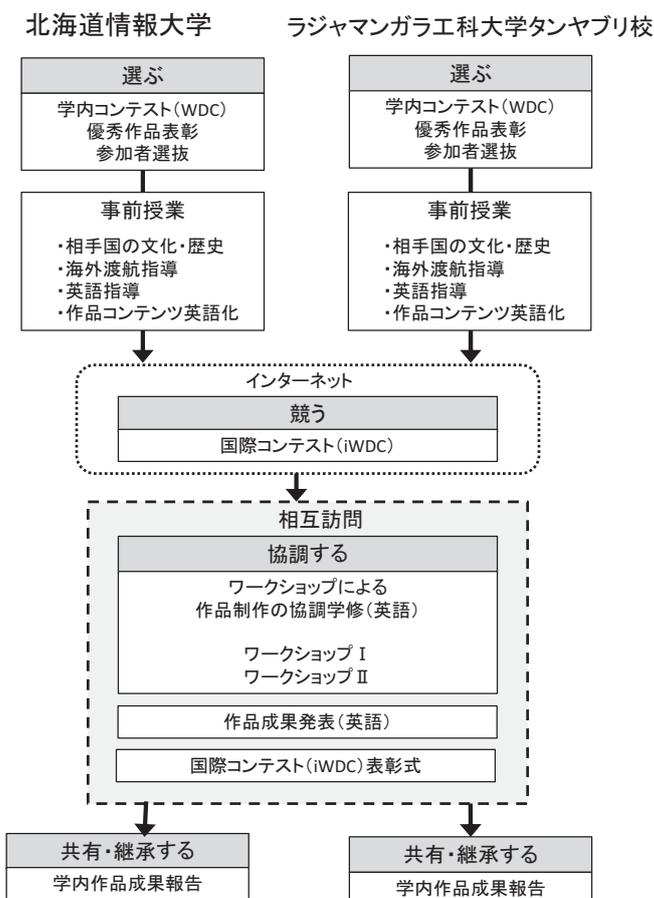


図1 iWDCモデル

学生相互訪問型ICT作品制作ワークショップ、そして「国際コラボレーション」は、Web作品制作としてスタートしましたが、制作する作品の範囲をショートフィルム、コンピュータプログラムと広げていく際に、本プログラムの本質をiWDCモデルとして明確にしています。このモデルを図1に示します。iWDCは、国際WEBデザインコンテストの略称です。このモデルは、4つの要素「選ぶ」、「競う」、「協調する」、「共有・継承する」で特徴づけられます。すなわち、ワークショップに先立ち、学内コン

テストにより優秀な作品が選ばれます（「選ぶ」）。次に、選ばれた作品は、両大学による国際コンテストにエントリーされ、その制作者の内、成績条件を満たした学生はワークショップのための事前授業を受講します。事前授業の学修項目は、概ね図1に示した通りですが、国際コンテストエントリー作品のコンテンツ英語化指導も行われ、英語化された作品によって、両大学の学生は技術とコンテンツを競



写真1 ワークショップ  
(制作スケジュール作成の講義と演習、2015)

い、入賞作品が決められます（「競う」）。国際コンテストの作品審査と同時進行になりますが、事前授業を受講した学生はワークショップに参加します（「協調する」）。ここでは、本学学生とRMUTT学生の混成グループが協力して作品を制作します。この作品は、事前の国際コンテストとは別の作品であり、競う段階で磨いた技術を持ち寄り協調することになります。すなわち、学生たちは、ワークショッ



写真2 ワークショップ (iWDC、2015)



写真3 ワークショップ (iSFC、2015)



写真4 ワークショップ (iCPC、2015)

ブに先立つ学内コンテストの作品、すなわち英語化された国際コンテストの作品と、ワークショップの作品の2つの作品を制作することになります。ワークショップは、本学とRMUTTの2会場で順に開催されますが、2つ目のワークショップの最終日には、ワークショップで制作した作品の報告を英語で行います。また、この日には作品の報告に引き続き、国際コンテストの入賞作品の表彰式も行われます。2つのワークショップを実施する会場の順番は、毎年入れ替わるので、表彰式も本学とRMUTTで交互に行われますが、本学で表彰式を行う際にも、RMUTTの学長、副学長などVIPが出席されます。

ワークショップ終了後は、それぞれの大学でワークショップの作品を同級生や後輩、教職員に報告するとともに、次の年度に継承することを目的として報告会が行われ（「共有・継承する」）ます。

上述のように、「国際コラボレーション」の対象をショートフィルム (iSFC)、コンピュータプログラム (iCPC) と拡大して実施するに当たり、それぞれの分野で用いるICTの特徴により多少のプログラムの違いはあるものの、基本的にはiWDCモデルに従って、本プログラムを進めています。写真1 - 写真4はワークショップの様子です。

「国際コラボレーション」の成績評価は、ワークシ

ワークショップ最終日、作品報告会の直後に両大学の教員が参加する成績会議で、ワークショップの作品とワークショップの作品制作態度等に基づいて行います。写真5は成績会議の様子です。



写真5 成績会議 (RMUTT、2014)

なお、「国際コラボレーション」の教育効果については、ワークショップや作品報告会に参加した教職員の評価とアンケートを用いて行っています。アンケートは、ワークショップ参加学生についてワークショップの前後に行うとともに、学内コンテストには参加したがワークショップには参加できなかった学生および学内コンテストにも参加しなかった学生について行ってきました。今年度は、まだアンケートの実施集計が終了していませんが、昨年度までのアンケート結果については、グローバル人材育成教育学会紀要とPCカンファレンス全国大会論文等で公表していますので、ここでは詳しく説明しませんが、「英語コミュニケーション力」、「将来外国人と働きたいか」、および「日本の長所短所を考える」等の項目で、ワークショップ参加学生には効果が表れています。このことから、先に述べたグローバル人材の3要素の育成にはある程度の効果があると考えています。

### 実施体制

「国際コラボレーション」とそれに伴う学内および国際コンテストは、多くの教職員の協力と多大な努力のもとに実施されています。表2、表3は、本プログラムに直接係わる本学およびRMUTTの教職員のリストです。「国際コラボレーション」ワークショップを成功させるためには、本学とRMUTTの教職員の休日を返上した学生指導はもとより、両大学を会場とするワークショップでの学生・教職員の

宿泊、移動、食事の手配・準備の他、外部資金への応募、採択後の手続き、報告書の作成等々、実に多くの作業とそれに係わる教職員の尽力があって、成立しています。本プログラムを継続・発展するためには、これらの作業に係わる教職員の負担をできるだけ軽減するための環境整備も重要な要素であり、改善すべき多くの課題があります。

また、上述のように、本プログラムやその前段の国際コンテストを実現する上で、日本私立学校振興・共済事業団の教育・学習方法等改善支援、留学生交流支援制度 (SS&SV、短期派遣、短期受入れ) および独立行政法人・科学技術振興機構 (JST) のさくらサイエンスプランの採択は、本学およびRMUTTの支援と並んで大きな支援になってきましたが、今後もJASSOやJSTの支援が得られるという確証はありません。そのような場合の対応も大きな課題になります。

このように、様々な課題はあるものの、学外でも本プログラムは評価されています。JASSOの留学生交流支援制度に5年連続採択されていますが、今年度は、JASSOから職員の細谷聡氏と関西大学の池田佳子教授が、本学の担当教職員と学生にインタビューするために、ワークショップ期間に本学を訪れました。また、JSTのさくらサイエンスプランにも2年連続で採択されています。一方、日本では、これまで新聞だけでなくテレビニュースでも本プログラムが報道されましたが、タイでも、最も発行部数が多い新聞のWebニュースで報道され、タイ国内でも評価されつつあるようです。今年度2015年度のワークショップには、RMUTT学長の訪問団に、タイ王国首相府予算局の予算分析官も同行して来学されました。本学の学生がRMUTTに滞在する際の諸費用をRMUTTはタイ政府に予算申請してその支援を得ていますが、やはり本プログラムが評価された結果の訪問であると聞いています。

また、RMUTTの学長であるDr. Prasert Pinpathomrat氏から「大学を卒業した後も、自主的に学習を継続する学生を教育する上で非常によいプログラムであり、今後も充実し継続したい」という評価をいただいています。これは、本プログラムが人材育成としての国際貢献を果たしていることの証左ではないかと思っています。さらに、2008年度の第1回学生交流に参加した上述のPongpon Nilaphruek氏だけでなく、2011年度以降のワークショップに参加した学生の中からも、RMUTTの講師やICT部門の技術職

表2 北海道情報大学の担当教職員  
\*は連絡担当者、( )内は所属学科

Hokkaido Information University	
Coordinator	*Professor Yuichi Anada(Business)
Web Design Contest	*Associate Professor Mitsutaka Yasuda (Media) Professor Masaharu Kawakami(Media) Professor Naohiko Hayata(Media) Associate Professor Tohru Hirohoku (Media) Associate Professor Hajime Saitoh (Media) Professor Simon Thollar (System)
Short Film Contest	*Associate Professor Eiji Shimada(Media) Lecturer Keitaro Ohshima(Media) Lecturer Joel Rian(Business) Professor Shigeru Mukaida(Media) Professor Hiroshi Miura(Media)
Programming Contest	*Associate Professor Kenji Saito(System) Associate Professor Jiro Tanahashi (System) Associate Professor Fumitake Taniguchi (Business) Associate Professor Mitsuyoshi Nagao (System) Lecturer Satoru Morikawa(Media) Lecturer Masayuki Fukumitsu(Media)
English Teachers	Professor Simon Thollar(System) Lecturer Joel Rian(Business)
Secretary	*Ms. Sumiyo Oguro

員として活躍している卒業生がいることも、タイの若者の人材育成に貢献しているとの自信を与えてくれています。

### 今後の交流

全ヨーロッパに渡る国境にとらわれない初期の大学から始まり、ナショナリズムの時代を経て、今日再び、大学は国境を越えた学生の流動化へ向かっています。ボローニャプロセスはもとより、今年2015年からASEAN10か国でも国境を越えた学生の流動化システムが始動します。日本も近隣諸国との政治的軋轢にもかかわらず、数年前から日中韓の学生流動化を模索し始めており、ASEAN諸国にとどまらず、幾つかの大学は日中韓の相互訪問型学生交流を実施しています。国境を越えた大学間のコラボレーションによる人材育成は着実に始まっているのです。本学の「国際コラボレーション」ワークショップは、本学学生のグローバル人材育成であるとともに、RMUTTの学生の人材育成にもなっています。

表3 RMUTTの担当教職員  
\*は連絡担当者、( )内は所属学部

Rajamangala University of Technology Tanyaburi	
Coordinator	*Vice President Dr. Sommai Pivsa-Art
Web Design Contest	*Mr. Deachrut Jaithavil (Engineering) Mr. Teerasan Lialang (Mass Communication Technology) Ms. Wanchanok Sunthorn (Mass Communication Technology) Dr. Burassakorn Yoosooka (Science and Technology) Dr. Thanyaporn Boonyang (Technical Education) Mr. Kitipoom Vipahasna (Technical Education)
Short Film Contest	*Dr. Uravis Tangkijviwat (Mass Communication Technology) Mr. Yuvayong Anumanrajadhon (Mass Communication Technology) Ms. Prapaporn Dolkit (Mass Communication Technology)
Programming Contest	*Mr. Nachirat Rachburee (Engineering) Mr. Manoch Pracha (Engineering) Mr. Niti Wittayawiroj (Science and Technology) Mr. Pongphon Nilaphruek (Science and Technology)
English Teacher	Mrs. Sudthai Krusong (Liberal Arts)
Secretary	*Assistant to President Dr. Natha Kuptasthien (Engineering)

本学は、人材育成という国際貢献により世界の潮流の中にいると言えるでしょう。

2011年度の第1回相互訪問型ICT作品制作ワークショップに参加し、現在はRMUTTの講師である学生が、「こんどは、ワークショップで指導する立場に立ちたい」と語っていました。「国際コラボレーション」プロジェクトは、すでに本学とRMUTTの交流という既存の交流の域を離れ、両大学のボーダーを超えて2つの大学を俯瞰するメタ・スクールとして機能し始めたと考えています。

### 謝辞

本プログラムは、北海道情報大学とRMUTTの支援、および両大学の教職員の多大なる協力により行われています。この紙面を借りて御礼申し上げます。また、日本私立学校振興・共済事業団、独立行政法人・日本学生支援機構（JASSO）および独立行政法人・科学技術振興機構（JST）の支援にも感謝いたします。



して多くの情報を提供することができるのが利点です。学生サポートセンターの職員や雰囲気を知ることにより、来日後の不安が解消されて、大学生活に馴染みやすくなることが期待されます。また、先輩留学生が出演していることで、教材に親しみがわくとともに、学習の励みにもなると思われます。

会話の内容は日中の対訳つきで字幕が出るので、クラス授業でも自習でも活用できます。

このほか、大学・大学院入試用面接会話も教材化しました。会話に加え、ノックのしかた、入室のしかた、あいさつのしかたなども学べるようになっています。



学生：对不起，那本放在外面的蓝色的笔记本是我的。  
 学生支援中心：请稍等。可以在这张纸上写上你的学号吗？  
 学生：知道了。  
 学生支援中心：我现在去开锁，请跟我来一下。是这本吧？没错吧？  
 学生：是的。谢谢。



学生：不好意思。请问这边有没有遗失的笔记本被送过来啊？  
 学生支援中心：现在去确认一下，请稍等。（查找）是这本笔记本吗？  
 学生：不是的，是蓝色的笔记本。  
 学生支援中心：（拿出一本蓝色的笔记本）是这本吗？  
 学生：是的，没错。谢谢。

### 学生サポートセンターの会話



面试官：请进。  
 考生：（开门进入）打搅了。（走到面试官面前）我是考试号25号，南京大学日语班的王雷。请多多指教。  
 面试官：请坐。  
 考生：谢谢。  
 面试官：那么，现在就开始面试。你进了北海道信息大学以后想学什么呢？



面试官：请进。  
 考生：（开门进入）打搅了。（走到面试官面前）我是考试号25号，南京大学日语班的王雷。请多多指教。  
 面试官：请坐。  
 考生：谢谢。  
 面试官：那么，现在就开始面试。你进了北海道信息大学以后想学什么呢？

### 面接の会話

これらの視聴覚教材に出演された学生サポートセンターの松尾さん、国際交流・留学生支援室の今長さん、情報メディア学科の山北先生は、いずれも大熱演でした。

今回開発した教材は、POLITEの「南京大学外国語学院留学準備クラス学習支援」のところにアップされています。ぜひ多くの方々にご覧いただき、ご意見等をお寄せいただけたらと思います。

留学準備の教材として開発したものですが、来日後の会話練習にも活用ができるものです。日本語の

クラスでも積極的に活用していき、その効果を確認していきたいと思います。

教務部長、副委員長、田中 英夫、立花 峰夫、飯嶋 美知子、田中 里実、情報センター事務室長、国際交流・留学生支援室長、陳 楽兵（非常勤職員）、前田 真人（メディア教育センター）、前田 諭（メディア教育センター）

南京大学外国語学院留学準備クラス学習支援ワーキンググループ構成員

## FD活動 行事实績と予定（平成27年度前期-平成27年度後期）

日 程	行 事
4月16日(木)	第1回新任教員研修会 & 第1回新任教員対象CANVAS説明会
5月1日(金)～6月27日(土)	平成27年度 前期ピアレビューの実施
7月13日(月)～8月7日(金)	平成27年度 前期授業評価アンケートの実施
7月16日(火)～7月29日(水) 9月18日(金)～9月30日(水)	教育アドバイザー学生アンケートの実施
8月27日(木)	SD研修会（教職員向けDVDの視聴及び「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」の概要、取り組み 他）
8月28日(金)	SD研修会（教職員向けDVDの視聴及び文書実務・法規・学内規程など）
9月2日(水)・3日(木)	学生FDサミット2015夏 学生参加 追手門学院大学
9月3日(木)	SD研修会（窓口で役に立つ傾聴）
9月4日(金)	SD研修会（学校法人会計基準に基づいて作成される決算書（計算書類）の読み方及び財務分析の方式等の説明）
9月15日(火)	第10回カリキュラム・アドバイザーボード会議
9月17日(木)	FD Tips Day ～一日まるごとFD研修会～
10月2日(金)～12月25日(金)	平成27年度 後期ピアレビューの実施
10月27日(火) ～10月30日(金)	国際会議 EDUCAUSE 2015参加（予定） 米国インディアナ州インディアナポリス
11月中旬～下旬	2015年度第2回新任教員研修会（予定）
3月4日(金)	2015年度北海道情報大学FDフォーラム（予定）

## FD委員会WGの活動実績（平成27年度前期）

WG名	月例ミーティング等
全学教務・FD委員会	4/22(水)、5/27(水)、6/24(水)、7/22(水)、 9/30(水)
WG 1（学生による授業評価アンケート）	6/16(火)
WG 2（ピアレビュー制度の導入）	4/14(火)
WG 3（GPAとコンピテンシーの導入）	7/3(金)
WG 8（カリキュラム・デベロップメント）	4/20(月)、5/18(月)、6/15(月)、7/21(火)、 9/28(月)
WG 9（Own Teacher制度の導入）	7/9(木)
シリアスゲーム教材開発WG	5/21(木)、7/16(木)、9/10(木)
プログラミング教育WG	4/22(水)、5/20(水)、6/17(水)、7/22(水)、 9/29(火)
SD推進WG	7/13(月)
アクティブラーニング小委員会	5/15(金)、6/19(金)、7/17(金)、8/6(木)、 8/7(金)、8/25(火)
スタートアッププログラム小委員会	4/28(火)、6/17(水)、7/8(水)
学生FDとの連絡会議	4/14(火)

### 編集後記

コンピュータでプログラムを作るとは今でも続けることができている私の数少ない趣味ですが、近年の興味深い研究に刺激されますますます楽しく感じるようになってきました。一方大学の講義では楽しく教えられているかどうかと言うと甚だ心もとないයි。今ちょうど秋の夜長の季節ですが、学問の楽しさを感じるのに最適なこの時期に、学生に伝えるべき事についても考えていけたらと思います。

齋藤 健司